

## 1. 問題文を工夫することで、「数量の関係に着目する見方・考え方」を働かせる状況をつくる

文章から立式する際、「『全部で』と書いてあるから足し算。」「『のこりは』と書いてあるから引き算。」と、部分的な表現のみを頼りにする子は少なくない。本実践では、「数量の関係に着目する見方・考え方」を働かせ、図や言葉を使って問題場面の数量関係を捉えようとする子どもの姿を目指した。

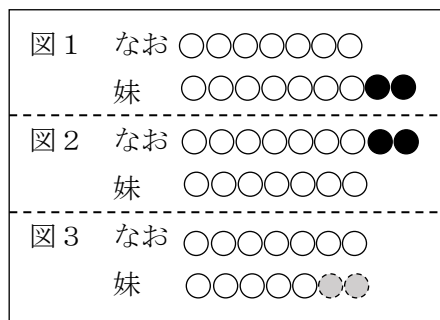
本時で扱う場面（4/4時間目）は、教科書通りだと「なおさんが雪玉を7個作りました。妹はなおさんより2個少ないです。妹は何個作ったのでしょうか。」という問題文になっている。しかし、このままの問題文では、数量の関係を捉えようとすることなく、単純に「『少ない』という言葉があるから引き算。」としてしまう子がほとんどだろう。そこで、2文目を「なおさんは妹より2個多いです。」と変えて提示することで、図や言葉を使って問題場面の数量関係を整理しなければ式が判断できない状況を作った。

## 2. 問題文の2文目を隠して提示することで、数量の関係に着目する見方・考え方が働きかけをつくる

初めに問題文の1文目と3文目のみを提示した。単元を通して、2文目を隠して提示することを続けていたため、子どもたちは「妹がなおさんよりどれくらい多いのか、少ないのか知りたいな。」と、数量の關係に目を向け、必要な情報を考えていた。2文目「なおさんは妹より2個多いです。」を提示すると、子どもたちは前時と比較し、「昨日は妹が4個多かったけど、今日はなおさんが多いんだね。」「『多い』って書いてあるけど、今日は足し算じゃないかもしれない。」と、問題文から数量の関係を捉えようと動き出した。ここで、「今日は何算になると思う？」と問いかけた。すると、「『多い』って書いてあるから足し算。」「なおさんのほうが多いから引き算。」と、考えの違いが浮き彫りになり、「足し算かな？引き算かな？」という問いが生まれた。そして、子どもたちは「図をかいてはっきりさせたい。」と、自力解決に向かっていった。2文目を隠して提示したことにより、子どもたちは自ら問題に働きかけ本時はっきりさせたい部分を明確にもって解決に向かうことができたのだ。

## 3. 図に働きかけることで、解決へ

全体交流では、図を軸に解決を図った。初めに、図1のような誤答を取り上げ、「どのように考えたと思う？」と、問いかけた。子どもたちは「『2個多い』って問題に書いてあったから、妹の方に2個増やしたんだと思う。」「式は $7+2=9$ になるね。」と、図を読み取り立式した。しかし、問題文と図を照らし合わせ、その違いに気付いた子の「問題文には『なおさんは妹より2個多い』と書いてあるけど、この図だと、妹の方が多くなってしまふよ。」という発言をきっかけに、全体で図1が問題文に合わないことを確かめることができた。次に、図2をかいた子の「この図だとなおさんが2個多くなるけど、なおさんが7個じゃなくなっちゃうんだ。」という困りを全体に共有した。すると、子どもたちは「なおさんは妹より2個多いってことは、妹がなおさんより2個少ないってことだ。」「なおさんに2個増やすんじゃなく、妹を7個より2個少なくすればいいんだ。」と、数量の関係を捉え直し、図3のような図を導くことができた。最後に立式させると、ほとんどの子が「 $7-2=5$ 」という式を書くことができた。中には、「 $5+2=7$ 」「 $7-5=2$ 」という式を立てた子も数名いたが、問題文や図と照らし合わせ、「妹の数を聞かれているから、 $7-2=5$ が合っているね。」と、すぐに気付くことができた。図を軸に全体交流を構成することにより、子どもたちは、「どのような図が問題場に合うのか。」「『なおさんが妹より2個多い』とはどういうことか。」と、問いを変化させながら、問題場面の数量の関係を捉えようとして思考し続けることができた。



このように問題提示や、交流の仕方を工夫することで、自ら働きかける力を育むことができるのである。